

産福連携推進の一助に 樹木粉碎機を新たに導入

朝日のあたる家

陸前高田市の一般財団法人みらい創造財団朝日のあたる家(新田國夫代表理事)は、剪定した枝をチップ状に砕く樹木粉碎機を新たに導入し、産福連携事業で活用している。農家でこれまで時間や手間をかけていた枝処理の問題を解消し、労力削減や就労希望者向けの仕事の創出などにつなげている。

朝日のあたる家では、人



粉碎機でツバキの枝をチップ状にする作業を行う
鈴木事務局次長(左)ら

手を求める産業と、就労機会を探す福祉のマッチングを図る産福連携事業を展開。働くことが困難な人への支援や、地域活性化など社会課題の解決を目指し、国の「休眠預金活用事業」を活用して事業を進めている。

産福連携のうち、農業に焦点を当てた産福連携では、連携を希望する市内農家と団体「タカタアグリコンソーシアム」(吉田司代表、TAC)を発足。幹事団体の朝日のあたる家のコ

ーディネーターや同連携の定着支援員が、農家と福祉事業所の円滑なやりとりをサポートしている。

今回導入した樹木粉碎機は、株式会社カスミ製で、動力はガソリン。直径14センチまでの木の枝を投入でき、チップ状に砕くことで、ほ場の作業エリアを確保できるほか、チップを肥料に活用できるなどさまざまなメリットがある。

2月からTACや産福連携の就労支援関係の現場で使用開始し、果樹園の剪定の枝や、ツバキ商品の生産過程で出る不要な枝の処理などで活躍。

木の枝だけでなく細い竹

も処理可能とし、「竹やぶを刈ってほ場を拡大したい」という農家の希望にも応える。

これまで重労働とされていた枝処理作業の効率化は、枝の運搬作業や、人手を必要とする手仕事の時間確保など、福祉関係の就労希望者向けの仕事創出にもつながる。

コーディネーターを務める朝日のあたる家の鈴木拓事務局次長(40)は「粉碎した木枝を発酵させて有機肥料にし、循環型農業を目指す取り組みも進めている」とし、導入した粉碎機のさらなる有効活用を見据える。